朝日新聞
2013年(平成25年)10月21日 月曜日 14版 社会 38

藤村、ロシアに自筆書簡

破戒の訳者宛て「深い歓び」

自然主義文学の先駆者、島崎藤村（1872～1943）のこれまで知られていなかった直筆の書簡がロシアで見つかった。部落差別を取り上げた長編「破戒」のロシア人翻訳者に宛てたもので、作品の背景やロシア語で読まれることへの感慨がつづられている。藤村の文学観を今に伝える貴重な資料だ。

モスクワのロシア国立文学芸術文書館に所蔵されていた書簡を発見したのは、熊本学園大学の太田丈太郎教授（ロシア文学、ロシア文化論）。1920年代前後の日ロ文化交流についての文献を調べていて偶然見つけたという。

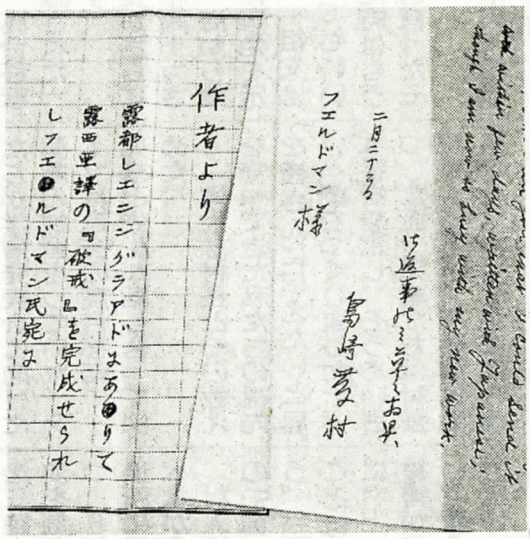
書簡は、「破戒」をロシア語に訳した日本語学者ナタリヤ・フェリドマン氏あて。翻訳・出版への同意と見られる英文が添えられた礼状と、「作者より」の2通が見つかった。

「作者より」は、藤村専用の原稿用紙5枚に、非常に丁寧な筆致で書かれている。破戒で描いた内容について「千九百四年度の日本の社会にあった特殊な部落民の物語です」「それらの人達は名こそ『新しい平民』ですが、その実、古い、古い部落の民として私達の間に残っていたのです」と説明している。

自作が訳されることに「心に深い歓びを覚えます」とした上で、「私達の文学はもっと無遠慮に批判されていいと思います」と、その意義を記している。

書簡に年号は記されていないが、ロシアで出版されたフェリドマン氏訳の「破戒」（1955年刊）には、「作者より」の抄訳とみられる「作者序文」が付されており、そこには1930年と書かれている。（駒木明義＝モスクワ、平井良和）

ⓓ デジタル版に書簡全文



英文と藤村の署名が記されている礼状（右）と、藤村専用の原稿用紙に書かれた「作者より」＝モスクワの国立文学芸術文書館

島崎藤村と「破戒」

1872年、木曽・馬籠村（現岐阜県中津川市）に生まれる。詩人として出発したが、1906年、「破戒」を自費出版し小説家に転向した。「破戒」は、被差別部落出身の小学校教師・瀬川丑松が、父の戒めを破って素性を告白するまでの苦悩を描いた作品で、自然主義文学の先駆といわれる。他の代表作に「夜明け前」など。71歳で死去。

（写真は藤村記念館提供）

また違う息づかい

島崎藤村学会名誉会長で藤村記念館長の鈴木昭一氏の話　この書簡が世に出るのは初めてだろう。訂正箇所が見えるように修正する「見せ消し」という手法などから直筆とみて間違いない。藤村がロシア語版の「破戒」に寄せた序文の内容は明らかになっていたが、ロシア語からの再翻訳だった。感謝を伝える控えめな表現に始まり、日本文学が理解される喜びなどを語り、再翻訳とはまた違う藤村の息づかいがうかがわれる。「破戒」は差別表現をめぐる作品への批判で書き直しもなされた。貴重な研究資料になるだろう。